The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『說文解字繫傳』「疑義篇」考（三）：「通釋篇」中の偏旁について
Author(s)	坂内, 千里
Citation	言語文化研究. 2017, 43, p. 51-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61283
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『説文解字繫傳』「疑義篇」考（三）
―「通釋篇」中の偏旁について―

坂　内　千　里

On *Yi-yi pian* of the *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan* (3)

SAKAUCHI Chisato

Summary: The *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan* (i.e. Xiao-Xu-ben), written by Xu Kai in the Southern Tang era, consists of two portions. The first 30 volumes contain his annotation upon the *Shuo-wen jie-zi* which is the oldest existing dictionary, and are named *Tong-shi pian*. In the latter 10 volumes, Xu Kai's original argument is developed.

In order to verify Xu-Kai's argument which he developed in *Yi-yi pian*, this paper examines the radicals of Chinese characters that are recorded in *Tong-shi pian*.

Keywords: Xu Kai, *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*, *Yi-yi pian*

一　はじめに

南唐 徐鍇（921−975：以下，小徐と称する）の著した『説文解字繫傳』は，現存する最古の字書である『説文解字』の全体を通して注釈を施した最初の著作である。『説文解字繫傳』（以下，小徐本と称する）は，『説文解字』（以下，『説文』と称する）の許慎の解説である説解に対して注釈を施した「通釋篇」30巻に，「部敍篇」2巻などの論10巻を合わせた全40巻から成る。

この論10巻に含まれる「疑義篇」は，3つの部分に分けられる。第一は，「古者文字少なくして、民務寡なし、是を以て古字 多く象形・假借たり（古者文字少、而民務寡、是以古字多象形假借）」で始まる，六書論である。第二は，「右據偏旁有之、而諸部不見、此蓋相承脫誤、非著書之時本所無、故記於此（大意：ほかの篆の偏旁となっていながら，それぞれの所属すべき部に見えないものは，伝写の間に誤って落とされたものであり，許慎が『説文』を著した時からなかったのではない）」と述べ，「偏旁にはあるが，諸部に見えない」ものとして，「劉・志・**驊**・希・崔・免・由」の7篆を挙げ論じている。第三は，『説文』の字体が小篆と小異あるもの（説文字體與小篆有小異者）を取り上げ，字形について論じている。

本稿は，「疑義篇」第二部分について考察した「『説文解字繫傳』「疑義篇」考（一）」（以下，

「疑義篇考（一）」と略称する），及び「『說文解字繫傳』「通釋篇」所収の親字について―「疑義篇」考（二）」（以下，「疑義篇考（二）」と略称する）[1]の考察を踏まえ，「通釋篇」中の「據偏旁有之、而諸部不見」ものについて考察しようとするものである。

「疑義篇考（一）」では，第二部分で取り上げられた「劉・志・**騂**・希・崔・免・由」の7篆について，それらが偏旁となる文字を中心に「通釋篇」中の小徐の注釈を検討し，1)「由」篆[2]のように20以上の文字の偏旁になっているもののみならず，「志」篆・「**騂**」篆のように偏旁として用いられている文字が1字しかないものが含まれていること，2)「通釋篇」と「疑義篇」で，小徐の文字の構成についての考え方にずれが生じている部分があること，3) 小徐の兄徐鉉等の校訂した『說文解字』（以下，大徐本と称する）の所謂「十九文」[3]について，それらを偏旁とする文字の有無を調査した結果，「剔」・「魋」・「睆」・「綦」・「峯」の5篆は，小徐本においても，ほかの文字の偏旁となっており，特に「剔」篆・「魋」篆の2篆については，「據偏旁有之、而諸部不見」という「疑義篇」の基準に当てはまるものであることは明らかであるにもかかわらず，「疑義篇」第二部分には取り上げられていないことを明らかにした。

これら2篆と，「疑義篇」第二部分に取り上げられている7篆との違いを明確にし，小徐が「此蓋相承脫誤、非著書之時本所無」と判断した根拠として，「ほかの文字の偏旁となる」以外に明文化されていない条件があるかどうかを明らかにするためには，「通釋篇」全篆につき，文字の構造が示されている部分を点検し，「據偏旁有之、而諸部不見」という基準に合致しながら，「疑義篇」に取り上げられていないものの有無を確認し，そのような篆があった場合には，それらに共通する特徴を，小徐の注釈に基づき検討する必要がある。しかし，小徐本はその伝本が極めて少なく，また早くに張次立の手が加えられ小徐の原本は残されていないなど，伝承上の問題が多く，今本の「諸部に見えない」ことが，小徐の原本にもなかったと安易に断定できない。そこで，「疑義篇考（二）」では，「通釋篇」の文字の構造が示されている部分の分析を行う準備として，今本小徐本「通釋篇」におさめられた親字の総数を調査し，許慎の原本及び小徐の原本と，どの程度の差があるかを調査考察した。その結果，1) 許慎の原本におさめられた親字の総数，正文9353，重文1163[4]に比べて，小徐本成書時[5]には，正文は137字少なく，重

1)『言語文化研究』41号（大阪大学　2015年　pp.109–130），及び『言語文化研究』42号（大阪大学　2016年　pp.107–126）。

2) 以降，混乱を避けるために，親字としての文字は「某」篆と表記し，それ以外の場合は「某」，又は「某」字と表記して区別する。

3)「左文一十九、說文闕載、注義及序例偏旁有之、今竝錄於諸部（左文一十九、說文闕載するも、注義及び序例・偏旁 之れ有り、今 竝びに諸部に錄す）」（十五篇下）として、「詔・志・件・借・魋・綦・剔・**觱**・醆・趄・顯・璵・癚・樹・緻・笑・迓・睆・峯」の19篆を挙げている。所謂「十九文」とは，これら19篆を言う。

4) 許慎「敍」（巻三十）に「後敍曰、此十四篇、五百四十部也、九千三百五十三文、重一千一百六十三」とある。以降，『說文』に収録された親字全体を指す場合には「親字」と称し，区別して用いる際には，最初に挙げられたものを「正文」，その異体字を「重文」と称する。なお，「正文」という語は，上記引用部分に対する段玉裁の注釈「今依大徐本所載字數覈之、正文九千四百卅一、增多者七十八文、重文千二百七十九、增多者百一十六文」（十五篇下）中の語を採用した。

5) 各部の部末にその部におさめられた親字数を示した記述（以下，便宜的に「部末の記数」と称する）は，小徐本成書時の収録文字の実体をかなりの程度反映したものと期待できるため，その合計を小徐の原本の収録字数とした。

文では逆に80字多くなっており，既に本来の姿からはかなり異なるものとなっていたこと，2）今本（祁刻本）におさめられている親字の総数は，小徐の原本より，正文では更に24字少なくなり，重文では更に16字多くなっており，許慎の原本より正文では161字減少し，重文では逆に96字増加したこと，3）今本小徐本には，大徐本に基づいて補入された可能性があるものが正文で111字あることを明らかにした。更に，文字の構造分析の調査対象は，小徐本成書時に確かに収録されていたと考えられるものに限定すべきであることから，その調査対象を，「通釋篇」に収録されている正文のうち，大徐本に依拠して補われたものではないものに限定し，重文については，小徐本成書時に確かに収録されていたと判断できる明確な根拠があり，その文字構造についての小徐の分析が明らかであるものとすべきであると論じた。

本稿では，以上の考察に基づき，対象となる「通釋篇」収録の文字につき，その全構成要素を調査し，「疑義篇」第二部分において，小徐が「此蓋相承脫誤、非著書之時本所無」と判断した根拠として，「ほかの文字の偏旁となる」以外に明文化されていない条件があるかどうかを考察する。

本論に入る前に，本稿における「偏旁」・「構成要素」という語の用法について説明しておく。小徐が「偏旁」という語を用いるのは，きわめて少なく，「通釋篇」では，「丄」篆（巻一 丄部）の注で六書を説く部分「空字雞字等の若きは、形或いは下に在り、或いは上に在り、或いは左右に在り、亦た或いは微旨有り、亦た多く配合の宜しきに從う、盡く義有るに非ざるなり、而して今の末學の篆文を爲る者は、妄りに偏旁を相い移易し、乖亂以て奇詭と爲す（若空字雞字等、形或在下、或在上、或在左右、亦或有微旨、亦多從配合之宜、非盡有義也、而今之末學爲篆文者、妄相移易偏旁、乖亂以爲奇詭）」のみである。これは，段玉裁が『說文解字注』（以下，段注と称する）「櫳」篆（六上 木部）の注で「龔」・「櫳」について，「字に偏旁稍移し、而して二字と爲す者有り、（略）竊かに疑い有りとす、（略）左木右龍の字は恐らく淺人の增す所なり（字有偏旁稍移而爲二字者、（略）竊有疑焉、（略）左木右龍之字恐淺人所增）」と言うのと，同様の指摘であり，「偏旁」の用法も，段氏の用法と軌を一にするものと考えられる。段氏は，このほか，例えば「哭」（二上 哭部）の注に説解の「省聲」を説き「一偏旁を取り、全字を載せず、指して某字の省と爲す（取一偏旁、不載全字、指爲某字之省）」と言い，「𪓐」（二下 齒部）の説解「齒差也」の注に「差なる者は正字たり。瑳磋は皆な偏旁を加うる字なり（差者正字、瑳磋皆加偏旁字也）」と言う。これらの「偏旁」は，文字を構成する各要素の総称であり，「（漢字の左側にある）偏と（右側にある）旁」を並列的に解する日本語の一般的用法とは，若干の違いがある。そのことは，小徐が文字の一部分を指す場合，「形或いは下に在り」（「丄」篆注），「𠂤は則ち疾字の旁」（例文36「牀」篆注），「俎の左旁も亦た切肉に象るなり（俎左旁亦象切肉也）」（巻十三 日部「昔」篆注）などのように，「形」・「旁」は用いても「偏」を用いないことにも表れている。そこで，本稿では，語意の微妙な違いによる混乱を避けるため，文字を構成する各部分を表す場合，小徐の語を引用する場合を除き，「偏旁」ではなく「構成要素」という語を用いる。

なお，本稿では，最も善本と称せられる道光十九年（1839）寿陽祁氏（寯藻）據景宋鈔本重刊本の影印である中華書局本（1987年：以下，祁刻本と称する）を底本として使用する。「今本」または「今本小徐本」という場合，原則としてこの祁刻本を指す。そのほか，大徐本は同治十二年（1873）陳昌治改刻一篆一行本（中華書局　1983年第7次印刷版），段玉裁『說文解字注』は経韻楼本（台湾芸文印書館　1979年第5版）を使用する。また，本文中の数字は，原則として序数は漢数字で，数値は算用数字で表記する。また，書名・篇名及び（訓読を含む）引用文には原則として旧字体を用いるが，使用フォントの制限により旧字体になっていないものもある。

二　調査対象文字の概要

調査対象文字としては，1）構造分析の対象とする文字，2）構造分析後に，それらの文字の構成要素が小徐原本におさめられていたかどうかを考察するための調査対象とする文字の2つの場合に分けて考えなければならない。

それでは先ず，構造分析の対象となる文字について，具体的に見ておこう。

「疑義篇考（二）」では，構造分析の対象とする文字を，「通釋篇」に収録されている文字のうち，1）正文であること，2）大徐本からの竄入ではないことという2つの条件を満たすものとし，重文については，1）小徐本成書時に確かに収録されていたと判断できる明確な根拠があること，2）その文字構造についての小徐の分析が明らかであるものという条件を満たすものとした。このうち，「大徐本からの竄入」については，「疑義篇考（二）」で既に詳細に説明したが，特に正文について考察を進める上で重要な点であるため，もう一度簡単に説明しておく。

先にも触れたように，小徐本は早い時期に張次立の手が加えられ，原本のままのものは伝わっておらず，伝本もきわめて少ない。『欽定四庫全書總目提要』経部・小学類「說文繫傳四十卷（兵部侍郎紀昀家藏本）」の項には，1）北宋には既に巻二五・三十の両巻を欠いていた。2）巻三十は後に得られたが，巻二五は失われたままで，大徐本により補われている。3）このほか各部にも大徐本の記述がそのまま竄入されたものがある。この竄入部分は，各文字の条の最後に付されている反切が「某某反」ではなく「某某切」となっていることにより判別できる，という3点が指摘されている[6)]。従って，「敍」を除く「通釋篇」28巻中，巻二五は大徐本により補われており，構造分析対象には含めるべきではないことがわかる。そのほかの巻についても，反切が「某某切」で終わっている文字については，大徐本からの竄入の可能性が高く，基本的にはやはり分析対象からは外すべきである。ただ，反切が「反」ではなく「切」で終わっているもの全てが大徐からの竄入とは限らないため，個別に検討する必要はあると考える。

6）原文は，以下の通り。「卷末有熙寧中蘇頌記、云、舊闕二十五・三十共二卷、俟別求補寫、此本卷三十不闕、或續得之以補入、卷二十五則直錄其兄鉉所校之本、而去其新附之字、殆後人求其原書不獲、因摭鉉書以足之、（中略）其餘各部闕文亦多取鉉書竄入、考鉉書用孫愐唐韻、而鍇書則朝散大夫行祕書省校書郎朱翱別爲反切、鉉書稱某某切、而鍇書稱反、今書內音切與鉉書無異者、其訓釋亦必無異、其移掇之迹顯然可見」

例えば，以下の 3 例はそれぞれ部首字であるが，いずれも反切が「切」で終わっている。部首字が原本になかったはずはないため，これら 3 字も小徐の原本に記載されていたはずの文字である。問題は，それが小徐の原本の姿を反映したものであるか否かである。なぜなら，小徐本と大徐本では，その基づいたテキスト（写本）そのものが異なっていたと考えられるため[7]，文字の構造についての記述も異なる場合があるからである。

1　三　天地人之道也、從三數、凡三之屬皆從三、臣鍇曰、通論備矣、仙藍切
　　弍　古文三、臣鍇曰、義與弍同　【巻一　三部】
2　ヹ　相與比敍也、從反人、ヹ亦所以用比取飯、一名柶、凡ヹ之屬皆從ヹ、卑履切
　　【巻十五　ヹ部】
3　重　厚也、從壬東聲、凡重之屬皆從重、臣鍇曰、壬者人在土上、故爲厚也、柱用切
　　【巻十五　重部】

そこで，それぞれを大徐本の記述と比較してみる。先ず「三」については，大徐本では「穌甘切」（一上 三部）となっており，その反切が小徐本と異なっている。更に，「通論備矣」という小徐本以外では意味を成さない小徐注が付されており，伝写の過程で「反」が「切」に誤写されたと考えるのが合理的であろう。それに対して「ヹ」は，大徐本（八上 ヹ部）でもその反切が「卑履切」となっており，小徐本と全く同じであり，更に小徐の注もない。これは，小徐原本の記載が失われたため，大徐本により補われたと考えるべきであろう。「重」は，「臣鍇曰」として小徐の注が付されており，一見すると「三」と同じく，小徐原本のままであるかのようであるが，大徐本（八上 重部）には「厚也、从壬東聲、凡重之屬皆从重、徐鍇曰、壬者人在土上、故爲厚也、柱用切」とあり，小徐注・反切まで含めて全く同じである。そのため，やはり小徐原本の記載が失われ，大徐本により補われた際に，小徐注の引用部分の「徐鍇曰」も「臣鍇曰」に改められた可能性が排除できない。

巻二五以外の巻で，その反切が「切」で終わる文字については，「三」のように小徐原本の姿を反映していると考えられる場合には，構造分析の対象とし，それ以外の場合にはその対象としない。

なお，以下は重文に「切」で終わる反切が付された珍しい例である。

4　沙　水散石、從水少聲、水少沙見也、楚東有沙水、臣鍇曰、會意、色加反
　　沙　譚長說、沙或從**尜**、**尜**、子結切　【巻二一　水部】

7）拙著「『說文解字繫傳』の特徴についての考察（一）」（『言語文化研究』20 号　大阪大学　1994 年）pp.159–160，及び（注 19）参照。

この重文「沙」は大徐本（十一上 水部）では，「尐、子結切」は，大徐等の注となっている。正文「沙」には小徐の注があり，更にその反切も大徐本の「所加切」とは異なっているため，小徐の原本には正文のみがあり，後に大徐本から重文「沙」を注も含めて補入したものであると考えられる。

この「沙」のように重文に反切が付されるのは特殊な例であり，重文には，大徐本からの竄入を見分ける手がかりとなる反切が付されていない。そのため，小徐本成書時に収録されていたと断定できる根拠となり得るのは，小徐の注が付されていることのみである。そこで，重文については，まず小徐注が付されているものを抽出し，それらのうち，説解または小徐注の中に文字の構成についての明確な言及があるもののみを構造分析の対象とする。

例えば，次の「淵」には，「𣶒」と「囷」の２つの重文がある。この２つの重文について，構造分析対象とする条件を満たすか検討する。

5　淵　回水也、從水、𣶒象形、左右岸也、中象水也、於蓮反
　　𣶒　淵或省水
　　囷　古文淵、從囗、臣鍇曰、會意　【巻二一　水部】

小徐注が付されているのは，「囷」のみである。また，「囷」には，説解に「囗に從う」という文字の構造についての言及があり，更に小徐は「會意」と注している。これは，小徐が「回る也」と解される「囗」（巻十二 囗部）と「水」により「回る水なり」という意味を表す会意字であると考えていることを示している。このように，「囷」は小徐注が付されており，文字の構成についての言及もあり，条件を２つとも満たしているため，構造分析の対象とする。しかし，「𣶒」については，「或いは水を省す」と文字の構造についての言及はあるが，小徐注が付されていないため，分析対象とはしない。

本来は，まず上記のような分析を行い，対象を確定してから構造分析を行うべきであるが，手順が繁雑になりすぎ，見落としの可能性も高くなる。ミスを最小限にするために，手順を単純化し，次の３段階に分けることとした。1）巻二五以外の27巻におさめられている全ての文字に対して，構造分析を行う。2）正文であり，大徐本からの竄入ではないという２つの条件を満たす文字―即ち，正文のうち大徐本からの竄入が疑われる反切が「切」となっているものを除いた文字のみを対象とし，そこから抽出された構成要素を分類する。3）反切が「切」で終わっている文字及び重文から抽出された構成要素のうち，2）で抽出された構成要素にはなかったものを選び出し，その構成要素を抽出した文字に対して，上記の方法で構造分析対象とすべきものであるかどうかを確認する。

構造分析対象とする文字数をまとめたものが，〈表１〉である。以下は，説明のために，そのうち巻一所収部の数値，及び合計部分を抜粋したものである。〈表１〉全体は，本稿の末尾に資

料として提示する。なお，巻二五は，全体が大徐本による補入であり，構造分析の対象としないため，〈表 1〉は，巻二五所収の「467 糸部」[8]から「478 卵部」を除く 528 部についての調査結果を示したものである。

表中の「部 No.」は，『說文』540 部に通し番号を付したものである。「部首」はそれぞれの部首字である。「部末記数」は，各部の部末にその部に納められた親字数が「文五　重一」（「巻一一部」）のような形で示されたものである。これは，小徐本成立時の各部の収録字数をかなりの程度反映したものと考えられる。「実数」は，今本小徐本の正文・重文の文字数を示したものである。「（大徐）」欄は，「正文」中，反切が「切」で終わっているものである。なお，数字の背景が灰色で表示されているものは，部末記数と実数が異なるものである。

〈表 1〉　抜粋

部No.	部首	部末記数		実数		
		正文	重文	正文	重文	（大徐）
1	一	5	1	5	1	
2	丄	4	6	4	6	
3	示	65	13	68	13	5
4	三	1	1	1	1	1
5	王	3	1	3	1	
6	玉	126	15	126	16	3
7	玨	3	1	3	1	
8	气	2	1	2	1	
9	士	4	1	4	1	
10	丨	3	2	3	2	
（略）						
540	亥	1	1	1	1	
	合計	8990	1190	8970	1205	119

「疑義篇考（二）」（pp.111–116）では，「部末記数・重文」を「1200」，「実数・正文」を「8966」，「実数・重文」を「1216」，「実数・（大徐）」を「111」としていた。これは，「410 水部」の「部末記数・重文」を「20」とすべきところ，誤って「30」としていたこと，「沘」（例文 4）を本来「重文」とすべきところを「正文」として計算していたこと，反切が「切」で終わるものをいくつか見落としていたことなどの誤りによる。手作業に負うところが多いため，誤りを完全に排除することは難しいが，今回再度集計したことにより，これらの誤りをかなり修正できたと考える。この数値と，巻二五については便宜的に大徐本により補われたもの（正文 226，重文 43）に依拠して，改めて全 28 巻の数値を許慎「敍」（正文 9353，重文 1163）と比較すると，小徐本成書時には，正文は既に 137 字少なくなっており，重文は逆に 70 増加している。更に今本はそれよりも正文が 20 字少なくなり，重文は 15 字多くなっていることになる。つまり，正文の中には，小徐本成書時にはおさめられていたが，今本ではなくなってしまった文字があるということで，こ

8）以下，表を見る際の参考になるように，最初にその部の通し番号を付して示す。

のことは，この後の考察においても特に注意しておくべき点である。

以上より，第一段階では，正文8970字，重文1205字全てを対象として構造分析を行い，第二段階では，そのうちの正文8970字中，大徐本からの竄入が疑われる119字を除く8851字を，次の第三段階では，その残り―つまり，反切が「切」で終わっている119字，及び重文1205字を，それぞれ対象として分析を行う。

なお，構造分析後に，それらの文字の構成要素が小徐原本におさめられていたかどうかを考察するための調査対象は，重文及び巻二五など大徐本により補われた文字全てを含めた「通釋篇」28巻に収録されている全文字とする。

三　構成要素の分類

まず最初に，第一段階で分析対象とする正文8970字，重文1205字の全10,175字につき，以下のように，それぞれの文字の構成要素を抽出する。

6　杶　木也、從木屯聲、夏書曰、杶幹栝柏也、臣鍇按、字書杶木似樗、中車轅、實不堪食、丑巡反

　　櫄　或從熏、臣鍇曰、熏聲

　　杻　古文、臣鍇曰、杶丑旁紐也　【巻十一　木部】

6a　木　冒也、冒地而生、東方之行、從屮、下象其根、凡木之屬皆從木、臣鍇曰、木之於屮、彌高大、故從屮、下有根、屮者木始甲坼也、(略) 門逐反　【巻十一　木部】

まず「杶」は，「從木屯聲」とあるように，「木」と「屯」から成る。各部の部首字，この場合は「木」篆になるが，その説解に「凡そ木の屬は皆な木に從う」とあるように，各部に属する文字は，必ずその部首字を構成要素とする。これを便宜的に「第一構成要素」と呼ぶこととする。この「第一構成要素」については，〈表1〉の「実数・正文」の数値が，基本的にはそのままその文字を第一構成要素とする文字数となっている。つまり，「木」を第一構成要素とする文字数は，〈表1〉「206木部」の「実数・正文」の数値「418」である。重複を避けるために，以下では，この第一構成要素以外の構成要素を抽出してゆく。したがって，正文「杶」からは，声符「屯」を構成要素として抽出する。重文については，2つとも小徐注が付されている。重文「**櫄**」は，「熏」を声符と考えていることがわかるため，此を構成要素として抽出する。第二の重文「杻」には，構成要素についての直接的な言及はない。しかし，小徐注「杶・丑は旁紐なり」から，「杻」は，「丑」を声符とする文字であると考えていることがわかるため，「丑」を構成要素とする。

構成要素を抽出する際に，注意すべき点が2つある。

まず第一は，象形と会意の区別である。段氏は，「叙」の「象形」に注して以下のように述べる。

7　象形者、畫成其物、隨體詰詘、日月是也

［注］（略）有獨體之象形、有合體之象形、獨體如日月水火是也、合體者、从某而又象其形、如𥄕从目而以𠂉象其形、箕从竹而以𠀠象其形、衰从衣而以𠂉象其形、畺从田而以𠂉象耕田溝詰屈之形是也、獨體之象形、則成字可讀、**輒**於从某者、不成字不可讀、說解中往往經淺人刪之、此等字半會意、半象形、一字中兼有二者、會意則兩體皆成字、故與此別　【敍　十五上】

段氏は，象形には独体の象形と合体の象形があるとし，独体の象形の例として「日・月・水・火」を挙げる。合体の象形とは，「某に从い而して又た其の形に象る」とし，「𥄕（眉）・箕・衰・畺（疇）」をその例としている。更に合体の象形について説明を加え，1）独体の象形であれば，字となっており読むことができるが，「某に従う」の後に付されているものは字となっておらず読むことができない，2）そのため，説解の中で往々にして学のない者に削られる。3）これらの字は，半会意半象形，つまり，一字の中で象形と会意を兼ねるものである。会意であれば，2つの要素はいずれも字となっているため，これとは異なる，と述べている。このように，文字には，合体の象形のように，文字と非文字（「字と成らずして讀む可からざる」もの）を併せたものがあることは，文字の構成要素を抽出する際に注意すべき点である。

以下，この合体象形の例として挙げられた4字について，小徐本での記述を併せて詳しく見ておく。

まず「𥄕（眉）」は，段注では「目に从い而して𠂉を以て其の形に象る」となっており，「𠂉」は眉の形に象ったものであり，合体象形の文字だとする。小徐本（例文7a）では，「目に從い、𥄕の形に象る」とのみあり，「𠂉」の部分がない。段氏は，これを「淺人」により削られたと考えている。これに対して，小徐はその注で「**𠂉**は**額**の理に象る也、指事」と述べている。つまり，小徐は「**𠂉**」が額の理（すじ）に象る象形であり，「𠂉」はその額（のすじ）と目との間にあるものを指し示したもので，指事の文字であると考えている。文字の構造についての考え方が、段氏とは異なっていると考えられる。

7a　𥄕　目上毛也、從目、象𥄕之形、上象**額**理也、凡𥄕之屬皆從𥄕、臣鍇曰、**𠂉**象**額**理也、指事、閩之反　【巻七　眉部】

「衰」も，「衣」と蓑（草で作った雨具）の形に象った「𠂉」から成るが，やはり説解中に「𠂉」の部分がない。

7b 衰 艸雨衣、秦謂之蓑、從衣、象形、臣鍇曰、蓑音闢、宣靴反
𧝓 古文衰 【巻十六 衣部】

以上2字については，段氏の説明の通りであるが，次の「箕」と「𠕋（𠕋，疇）」については，若干の疑問がある。「箕」については，箕の象形とされる「𠕋」が独体の象形字である「古文箕」と同じであり，「丌」も「下基也」（巻九 丌部）とされる独体の象形字である。3要素とも文字と考えることができ，会意との違いが明確ではない。「𠕋」についても，耕地の溝が詰屈する形の象形とされる「𢀛（𢀛）」が，或体と同じであり，独体の象形字であるとも考えられ，やはり会意との区別が明確ではない。

7c 箕 簸也、從竹、𠕋象形、下其丌也、凡箕之屬皆從箕、臣鍇曰、丌其下也、居而反
𠕋 古文箕、臣鍇曰、此直象形 【巻九 箕部】

7d 𠕋 耕治之田也、從田、𢀛象耕田溝詰屈也、陳收反
𢀛 𠕋或省 【巻二六 田部】

「成字可讀」とするか「不成字不可讀」とするかが明確ではないこれらの文字は，合体の象形の例としては，適切ではないと考える。しかし，このように文字であるか否かの判断が微妙な構成要素があることは，この後で構成要素を分類していく上で重要な点であるため，注意すべき第一の点として挙げた。

注意すべき第二点は，隷定の問題である。つまり，同一の文字が，場所により異なる形に隷定されたり，逆に異なる文字が同一の形に隷定されることである。例えば，例文7dの「𠕋」が「疇」と隷定されたり，「𠕋」が「票」，「𠕋」が「西」，「𠕋」・「舌」がともに「舌」と隷定されるなど，数多く見られる。

第一段階では，以上のような分析を，巻二五を除く「通釋篇」27巻におさめられた全ての文字―正文8970字及び重文1205字に対して行った。次に第二段階として，そのうち，大徐本からの竄入が疑われる119字を除く正文8851字から抽出した構成要素となっている文字約8900字について，小徐本の中の出現場所により3つに分類したものが，次の〈表2〉である。

〈表2〉の1行目の「文字数」は，その文字が構成要素として含まれる文字数を示す。「正文（大徐以外）」は，その文字が小徐本の正文であり，かつ反切が「切」で終わるもの―表中では「正文（大徐）」に示している―ではないものを指す。「重文」は，小徐本中の重文であることを示す。

例えば，「人」は，「介」（巻三 八部），「竟」（巻五 音部），「𠕋」（巻七 𠕋部）など計56の文字の構成要素となっており，かつ「人部（巻十五）」の部首字である正文であることから，「文字数」「51

～60」で「正文（大徐以外）」に「b287c001人」を分類している。なお，「b287c001」は「人」の分類番号で，「b」は部番号，「c」はその部内の何番目の正文かを示す。従って「b287c001」は287番目の部（人部）の最初の文字であることを示す。以下同じであるが，巻二五に属する文字は，分類番号を振っていないため，例えば「文字数11～15」・「正文（大徐）」欄の「b471m25蜀」のように，部内の順番を示す「c」の代わりに「m25」で巻二五に属することを示している。重文は，正文の番号の後に，「a」「b」「c」「d」のようにアルファベットを付している。例えば，「文字数16～20」・「重文」欄「b144c001d其」は，「b144c001箕」（巻九 箕部）の四番目の重文であることを示している。

また，二千種類近い文字を全て表に入れるのは繁雑に過ぎるので，多いものから順に最初の

〈表 2〉

文字数	正文(大徐以外)	正文(大徐)	重文
51～60	b287c001人/b001c001一/b022c001口 （計3）		
41～50			
31～40	b076c001又/b047c001干/b494c001且 （計3）		
26～30	b022c155各/b077c002卑/b389c001大/b480c130圭/b030c001此/b109c001隹/b429c001非/b206c001木 （計8）		
21～25	b095c002甫/b181c005今/b024c005單/b051c001句/b147c001工/b151c003曷/b254c002兼/b491c001幵/b016c002分/b016c009兆など(計30)		
16～20	b014c002莫/b016c001八/b187c001高/b344c001包/b377c052犮/b382c072叟/b415c002巠/b443c212婁/b540c001亥/b022c063召/b022c089台/b027c001止/b154c002奇/b201c001韋/b242c001多/b342c001辟/b359c002昜など(計65)		b144c001d其 （計1）
11～15	b044c003扁/b062c001収/b076c024取/b092c007敄/b099c001目/b135c136鼻/b168c014虒/b174c003音/b188c003尢/b192c002良/b275c001冖/b276c002同/b289c009艮/b297c002監/b311c003兒/b311c005兌/b331c003彡/b347c003禺/b368c001易/b451c026戔/b480c129垂/b525c001子/b016c004曾など （計133）	b471m25蜀/b289c008卓(草) （計2）	b146c002a差/b301c001a求/b382c074a焦/b236c003a參 （計4）
10	b015c002少/b016c007詹/b027c006莽/b031c002乏/b036c002延/b049c001只/b058c005章/b064c001共/b085c001臣/b097c002爾/b109c006嶋/b111c002蔓/b121c002畢/b122c001莠/b129c002爰/b129c006爭/b137c028列/b167c005虛/b172c001去/b181c004侖など （計47）		b012c383b折 （計1）
9	b003c021祭/b005c003皇/b010c001丨/b022c060君/b022c094呈/b022c161咼/b031c001正/b039c001牙/b052c001丬/b055c002世/b065c001異/b076c022叔/b092c001支/b108c004翟/b116c001瞿/b127c001予/b135c095胥/b150c001甘/b151c001曰/b167c001虍など （計60）		b253c020a术(朮)/b423c001a云/b538c002a尊 （計3）
8	b012c366芻/b016c010公/b022c079畫/b027c011疌/b028c002登/b029c002歲/b071c001鬲/b076c007麥/b080c003肅/b083c001隶/b084c001臤/b113c004蔑/b129c008兮/b135c076隋/b137c013則/b138c001刃/b143c001竹/b151c007曹/b153c001丂/b170c001皿/b185c014畜など(計49)	b296c001重/b475m25它 （計2）	b119c002a朋(倗)/b184c005a全/b480c050a坐 （計3）
7	b018c001半/b034c014微/b043c001龠/b047c003屮/b086c013殴/b092c027更/b092c063烝/b093c002學/b095c003庸/b096c001爻/b107c001習/b116c002矍/b119c001鳥/b123c002幼/b134c001骨/b143c144算/b151c005替/b151c006沓/b152c001乃/b153c002甹/b157c005平/b159c001喜/b168c001虎/b173c001血/b184c002内/b186c005侯/b188c001囘/b198c001夊/b198c003戛など （計66）	b372c017麃 （計1）	
6	b003c001示/b016c006豕019c001牛/b033c075連/b034c001彳/b037c001行/b044c001冊/b059c003妾/b068c002麗/b074c005巩/b076c025彗/b094c001卜/b098c002夏/b102c001盾/b103c002舅/b109c022雝/b119c034難/b120c001烏/b126c001玄/b135c017胃/b145c005畀/b147c004巨/b167c006虖 など（計68）	b463c026發/b469m25絲/b472m25蚤(計3)	
5	b001c004丕/b006c001玉/b009c001士/b012c109芙/b012c282茲/b015c001小/b024c001皿/b024c003嚴/b040c083路/b041c001疋/b042c001品/b046c001舌/b062c005弇/b062c017具/b081c001聿/b089c003將/b094c004貞/b101c001眉/b108c001羽/b123c001幺/b129c003鬲/b129c009敢/b145c003典など（計79）	b467c-25-01a1糸 （計1）	
4	b009c003壯/b011c007熏/b012c001艸/b012c322甾/b012c354若/b012c384卉/b012c407蒙/b012c438茸/b019c042犀/b029c001步/b033c083遂/b034c004復/b035c004建/b057c002善/b061c001奠/b062c003丞/b062c013戒/b076c003左/b076c012尹/b076c019戾b086c019役/b099c070相/b104c007百など（計104）	b289c005頃/b300c037褱/b473m25蟲(計3)	
3	**b002c002帝/b005c001王/b011c006**炎/**b012c214**葛/**b012c251**葉/**b012c445**春/b022c180谷/b023c001凵/b024c004甹/b027c007歴/b033c001疋/b033c039逢/b034c036御/b037c012衞/b040c001足/b054c008廿/b056c020啻/b058c006竟/b059c001辛/b060c001羊/b060c004對/b062c002奉 など（計137）	b471m25菫/b467m25霖/b470m25率/b471m25蚩/b474m25風 （計5）	
2	b001c003天/b001c005吏/b002c001二(上)/b003c059祟/b003c062禁/b004c001三/b005c002聞/b011c004毒/b012c007荅/b012c043蘭/b012c317薄/b012c432蒿/b014c001黹/b017c001釆/b017c004悉/b019c023牟/b022c036含/b022c065唯/b024c002毀/b027c010歸/b027c013少/b033c019過など（計244）	343c010匈/b467m25絶/b467m25穿/b467m25綦/b467m25維/b467m25鯀/b471m25強/ b472m25蠡/b476m25龜/b477m25黽/b477m25竈 （計11）	
1	b003c027祖/b003c038祝/b003c061祘/b006c058瑩/b011c005岑/b012c012莠/b012c036萃/b012c064薊/b012c079苦/b012c128募/b012c134蓋/b012c145艾/b012c215蔓/b012c258英/b012c276蔵/b012c298苗/b012c299苛/b012c301蕨/b012c302荒/b012c378蒸/b035c001廴/b036c001延など（計604）	b137c064剔/b346c017魁/b350c033峯/b495c015斥/b467m25繭/b467m25繇/b467m25繼/b467m25約/b467m25繯/b467m25緘/b467m25徽/b467m25繁(計12)	

数文字を示し，各欄の最後にその合計文字数を示している。

この表から，「b287c001人」や「b022c001口」のように50以上の多くの文字の構成要素となっているものから，「b035c001辵」・「b003c027祖」のように構成要素として用いられている文字がわずかに1つだけであるものまでさまざまであることがわかる。なお，この表は，先にも説明したように，部首字である第一構成要素を除いた部分に関しての調査結果をまとめたものである。分類番号が「c001」となっている各部の最初の文字は，部首字であるため，その部内の文字の第一構成要素となっている。「人」は「287人部」に属するほかの244文字，「口」は「22口部」に属するほかの179字の構成要素ともなっており，「人」は計300（56＋244），「口」は計233（54＋179）の文字の構成要素となっている。同様に，「文字数・1」の欄にある「b035c001辵」も，「35辵部」の部首字であり，第一構成要素としてほかの3文字の構成要素ともなっているので，同欄の部首字ではないほかの文字と少し事情は異なる。しかし，部首字を除いて考えても，多くの文字の構成要素になっている文字より，ごくわずかな文字の構成要素になっている文字の方が，圧倒的多数を占めており，特にほかの1文字のみの構成要素となっているものが，群を抜いて多いことは，注目すべき点であろう。

「疑義篇」に挙げられている7文字については，既に「疑義篇考（一）」で詳しく見たが，ほかの文字と比較するために，もう一度見ておく。構成要素となっている文字数の多い順に「由」20字，「希」10字，「免」9字，「崔」3字，「劉」2字[9]となっている。「**驊**」・「志」について，小徐は，それぞれ許慎の原本にはおさめられていたと考える根拠として「**埠**」篆・「誌」篆を挙げている。しかし，今本では「**埠**」篆は，「**驊**省聲」ではなく「**觧**省聲」に作っており，「誌」篆は今本小徐本にはおさめられておらず，大徐本では新附字となっている。詳細はおくが，これらはともに伝写の過程における脱誤であると考えられる[10]。このようにわずか1文字の構成要素となっていることを根拠として許慎の原本に収録されていたと論じていることから，「疑義篇考（一）」では，この2篆にこそ，小徐が許慎の原本に収録されていたと判断した強い根拠となるものが隠されているのではないかと考えた。しかし，〈表2〉から分かるように，構成要素となる文字が1文字のみのものが600以上ある。このことは，小徐はたとえ1文字であっても，ほかの文字の構成要素となっているものは全て許慎の原本にはおさめられていたと考えて「疑義篇」でこの2篆を挙げたのであり，構成要素とする文字数の多寡は特に問題とはならないことを示していると考えられる。従って，わずか1字に基づいて許慎の原本にあったと判断した理由を探るのではなく，むしろ1字であってもほかの文字の構成要素となりながら，今本小徐本には親字としておさめられていない「**驊**」篆・「志」篆以外のものについて，「疑義篇」に取り上げられなかった理由こそを，考察すべきである。

9）「疑義篇考（一）」で挙げた数より，「劉」以外は少なくなっているが，重文と大徐からの竄入分を構造分析対象から除いた結果である。

10）詳細は，「疑義篇考（一）」pp.121–123参照。

また，「疑義篇」で，「志」篆が許慎の原本にあったと考える根拠となった「誌」篆が，小徐本原本には収録されていたはずであるにもかかわらず，大徐本では新附字として「言部」（三篇上）末に補われていることは，小徐本と大徐本が基づくテキストが異なることを端的に示していると言えよう。

なお，上述のように，たとえ1文字であってもほかの文字の構成要素となっている文字は，全て小徐の原本にはおさめられていたと考えられる。従って，〈表2〉の「正文（大徐）」及び「重文」欄に挙げた文字も，全て小徐本の原本におさめられていたと考えてよいであろう。ただし，大徐本からの補入分については，その説解が必ずしも本来の小徐本の姿を反映しているとは断定できないことは注意すべきである。

それでは次に，ほかの文字の構成要素となっていながら，今本小徐本にはその文字がおさめられておらず，〈表2〉のように分類できなかったものについて検討する。それらは，今本に見いだせなかった原因により，いくつかに分類できる。ここでは，第三段階で抽出された構成要素―つまり，大徐本により補入された正文，及び重文から抽出された構成要素のうち，第二段階では抽出されなかったものについても，併せて考察する。

まず第一は，誤刻の可能性があるもの，或いは誤刻ではないが，隷定の方法が異なるものである。例えば，

8　**櫡**　斫謂之櫡、從木著聲、竹勺反　【巻十一　木部】

では，説解は「著聲」に作っており，この「著」は今本小徐本にはない。しかし，篆体は「艸」ではなく「竹」に従う「箸」に作っており，大徐本でも「箸聲」に作る。本来「箸」（巻九 竹部）を声符とするべきところ，誤って今本小徐本におさめられていない「著」に作ったと考えられる。また，

9　**覩**　目赤、從見智聲、他狄反　【巻十六　見部】

では，声符も篆体も「智」に従っているが，この「智」はやはり今本小徐本にはおさめられていない。段氏はこの字の説解「智聲」を「**矢智**省聲」に改めた上で，「**矢智**、毛刻智に作るは誤りなり，今宋本に依る（**矢智**、毛刻作智、誤、今依宋本）」（八下 見部）と言うように，宋本により説解を改める。この「**矢智**」は「自部」（巻七）におさめられている。

以上のように，誤刻により，今本にない文字が構成要素となったと考えられるものはほかにも多数ある。また，隷定の違いによるものとは，次のようなものである。

10　渠　水所居也、從水㮚聲、臣鍇曰、㮚卽柜字、巨居反　【巻二一　水部】

では，「杲聲」となっており，この字は今本におさめられていない。これに対して小徐は「杲は卽ち柜の字」と注している。この「柜」は木部（巻十一）におさめられている。このように，隷定において，同じ構成要素の位置関係が異なるものもいくつかある。

11　遷　近也、從辵臺聲、臣鍇曰、臺音日、而吉反　【巻四　辵部】

の声符は「臺」に作っており，小徐注でも同じであるが，段氏はこの「臺聲」に対して，「按ずるに至部 𦍒は到るなり、至を重ぬると至を竝ぶるは一なり（按至部𦍒到也、重至與竝至一也）」（二下 辵部）と言う。「臺」は今本にないが，「𦍒」は「至部」（巻二三）におさめられている。

ここで，構造分析の対象とした重文から抽出された構成要素についても挙げておく。（但し，以降はいちいち区別して論じない。）誤刻の可能性があるものとしては，「𠛬」（「副」（巻八 刀部）の籀文「𠛬」に「從𠛬」とある）がある。籀文「𠛬」の注で，小徐は経書の中の字形について述べるのみで，文字の構成については言及していない。しかし，段氏は「當に重畐と云うべし（當云重畐）」（四下 刀部）と，「𠛬」ではなく「畐」を重ねたものに従うとすべきだとする。

誤刻，もしくは隷定の違いによると考えられるものは，ほかにも多数あるが，そのほとんどが，構成要素とする文字が 1 文字のみである。そのため，小徐自身の注がある場合を除き，ほかの文字の構成要素になりながら「疑義篇」に挙げられなかった理由が，誤刻・隷定の違いによると判断してよいかどうかを検証する決め手に欠けると言わざるを得ない。

第二は，独立して文字をなさないと考えられるものである。

12　番　獸足謂之番、從釆、田象其掌、臣鍇曰、本造此字爲獸足掌也、象形、復喧反
　　𧿹　番或從足從煩
　　𤴓　古文番、臣鍇曰、象獸掌形也　【巻三　釆部】
13　胃　穀府也、從肉、㠯象形、臣鍇按、白虎通、脾之府、穀之委、故脾稟氣於胃、云貴反　【巻八　肉部】

「番」・「胃」で，ともに「田」の形に隷定される部分は，それぞれ「獸の足の掌」と「胃」の形に象ったものであり，「陳なり，穀を樹うるを田と曰う（陳也、樹穀曰田）」（巻二六 田部）の「田」とは異なる。ともにいわゆる合体の象形字の一部であり，それだけでは文字とならない。同じ象形であっても，小徐が「獸の掌の形に象るなり」と注した古文「𤴓」は，独体の象形字であり，独立して文字となっている。

14　青　幬帳之象也、從冂、屮其飾也、臣鍇曰、幬音稠、單帳也、屮象其幄上飾形、非之適之字、口江反　【巻十四　冂部】

では，小徐は明確に「**屮**」が幄上の飾りの形に象ったものであり，「之適（ゆく）」という意味の「之」（巻十二 之部「出也」）の字ではないと注している。合体象形のほか，指事でも，一部が独立した文字ではない場合がある。

15　爭　引也、從**叉厂**、臣鍇曰、**厂**所爭也、指事、側泓反　【巻八　**叉**部】

では，下向きの手と上向きの手から成る「**叉**」の二つの手の間にある「**厂**」は，独立した文字ではなく，その争う対象となるものを示しているにすぎない。このように，合体象形や指事による文字は，独立した文字とは成らない部分を含むため，その部分は小徐本には親字として収録されていない。

第三は，小徐本原本には収録されていたものが，伝写の過程で脱落した可能性があるものである。

16　**𠤕**　未定也、從匕**𠬝**聲、**𠬝**古矢字、臣鍇曰、多聞闕疑也、銀眉反　【巻十五　匕部】

では，説解には「**𠬝**は古の矢の字」とあるが，「矢」篆（巻十 矢部）の下には，重文としてこの「**𠬝**」字はおさめられていない。これは，本来おさめられていたはずの重文が，伝写の過程で脱落したためではないかと考えられる。

このように，今本小徐本にはない文字の中には，明確に誤記や，独立した文字ではないと判断できるものもある。しかし，小徐本にはテキスト上の問題があるため，構成要素とする文字が 1 文字しかない場合，小徐自身が明記していなければ，その原因を断定できない場合の方が多い。また，小徐は全ての文字に注を付しているわけではない。そのため問題のある文字に注が付されておらず，小徐の考えを知る手がかりがない場合も多い。

既に見たように，それを構成要素とする文字数に特に意味がないのであれば―つまりわずか 1 文字を根拠とすることに特別な意味合いがないのであれば，複数の文字の構成要素になりながら，親字としては今本小徐本にはおさめられておらず，「疑義篇」にも取り上げられていないものの方が，小徐がなぜそれを「疑義篇」に取り上げなかったかを考える上で，よりふさわしいと考えられる。

親字として今本小徐本におさめられていないが，複数の文字の構成要素となっているものは，「爿」（11），「畾」（8），「尋」（4），「繇」（3），「**弅**」（3），「**𠬝**」（2）の 6 字である。文字の後に付した数字は，それを構成要素とする文字数を表している。ここでは，考察の手がかりが比較的多い「畾」，「尋」，「繇」を取り上げて考察する。「爿」は，それを構成要素とする文字が最も多いが，「疑義篇考（二）」（pp.121–122）で取り上げたため，最後にこの 3 文字と比較するにとどめ，詳細には論じない。

まず「尋」について見ておこう。

17 蕁 **芄**藩也、從艸尋聲、臣鍇按、本艸卽知母藥也、形似昌蒲而柔潤葉、至難死掘出、隨生須枯燥、乃止味苦寒、一名**蝭**母、田南反

薅 蕁或從爻、臣鍇按、今本草作此**薅**字 【巻二 艸部】

＊段注：薅 **芄**蕃也（注：今本篆文無彡、誤）从艸**𢓊**聲（注：**𢓊**各本作尋、誤、徒南切、古音在七部）

薅 薅或从爻 【一下 艸部】

では，「尋聲」となっており，篆体も同じである。しかし，段氏はこの篆体を「薅」に改め，更に「尋聲」を「**𢓊**聲」に改めた上で，篆体及び声符に「彡」がないのは誤りであるとする。「**𢓊**」篆は「寸部」におさめられている。

18 **𢓊** 繹理也、從工口從又寸、工口亂也、又寸分理之、彡聲、此與**𣪘**同意、度人之兩臂爲尋、八尺也、臣鍇曰、口言也、工爲器也、（略）又手也、寸法度理之也、彡音芟、似侵反 【巻六 寸部】

ここでは，「尋」を構成要素とはせず，「工」・「口」・「又」・「寸」を意符とし，「彡」を声符とする。小徐もそれぞれの構成要素の意味を説いており，「**𢓊**」篆は，「尋」をまとまった一つの文字として構成要素としていないことは明らかである。

ここで参考になるのが，「疑義篇」に挙げられた 7 篆の 1 つである「希」篆である。そこでは，小徐は以下のように記している[11)]。

19 案說文有稀**莃**等字、而無此字、亦脫誤、或疑稀字從禾從爻從巾、爻巾皆象歷歷然稀疏皃、**莃**字從稀省、亦未審也 【疑義篇 希】

小徐は，その基づいた『說文』には「希」篆はないが「希聲」の字が多いことから，もともとあった「希」篆が脱落したとする一方，「或いは疑うらくは稀の字は禾に從い爻に從い巾に從う、爻巾は皆な歷歷然として稀疏なる皃に象る」と言う。「稀」篆（巻十三 禾部）でも，説解の「從禾希聲」に対して，「當に禾爻巾に從うと言うべし、聲の字無し、後の人之（これ）を加う、爻なる者は希疏（まばら）の義、（略）巾も亦た是れ其れ希の象、**莃**と晞に至りては皆な稀の省に從う、何を以て之を知るか、說文巾部爻部竝びに希の字無し、是を以て之を知る（當言從禾爻巾、無聲字、後人加

11）詳細は「疑義篇考（一）」pp.114–116 参照。

之、爻者希疏之義、（略）巾亦是其希象、至**莃**與晞皆從稀省、何以知之、說文巾部爻部竝無希字、以是知之）」と言う。つまり，その基づいた『說文』の巾部・爻部ともに「希」字がないことを根拠として，「稀」篆は，「禾」と「希疏（まばら）」の意味がある「爻」・「巾」からなる会意字であり，「聲」の字は後の人が加えたものであるとし，更に，「**莃**」・「晞」は「希」ではなく「稀の省に從う」とする。これは，後述のように，小徐が六書においては，形声より会意を優先することを反映したものと考えられる。

「希」篆の状況を踏まえて再度「尋」についてみると，「尋」を声符とする文字が多いが，「尋」篆はない。また「尋」を構成要素としているように見える「**潯**」篆は，説解では「彡」を声符とし，「尋」ではなく「工・口・又・寸（合わさって乱を法度をもって理（おさ）める意を表す）」4字から成るとされており，小徐もそれに従っている。これは，「稀」篆の注で，自らが基づく『說文』に「希」篆がないことから，「希聲」ではなく「禾・爻・巾」3字の会意字であったはずだと判断したのと同じだと考えられる。つまり，このことは，小徐が基づいた『說文』には「尋」がおさめられていなかった可能性を強く示唆していると言えよう。そうであれば，次に，何故「尋聲」ではなく「**潯**省聲」となっていないのかが問題となる。

その点について考察するために，「蕁」篆（例文17）の段氏の注を参考にして，「尋」を構成要素とするほかの3篆を見てみよう。なお，最後の「𩰫」篆は，「蒦」篆の或体字であり，小徐の注が付されていないため，本来は構造分析の対象とはならないが，テキスト上の問題を考える上で参考になるため，併せて挙げている。

20　**鄩**　周之邑、從邑尋聲、臣鍇按、杜預曰、河南鞏縣西南有地名鄩、徐林反
【巻十二　邑部】
＊小徐：篆体のみ「彡」あり／　大徐：篆体・声符とも「彡」なし
段注：篆体のみ「彡」あり、注なし

21　**褥**　衣博大、從衣尋聲、忒欽反　【巻十六　衣部】
＊小徐：篆体・声符とも「彡」なし／　大徐：篆体・声符とも「彡」なし
段注：篆体・声符とも「彡」あり、注なし

22　潯　旁深也、從水尋聲、臣鍇按、淮南子曰、游於江潯海裔、似侵反　【巻二一　水部】
＊小徐：篆体・声符とも「彡」なし／　大徐：篆体・声符とも「彡」なし
段注：篆体のみ「彡」あり、注なし

23　𩰫　蒦或從尋、尋亦度也、楚辭曰、求矩𩰫之所同　【巻七　雈部「蒦」】
＊小徐：篆体のみ「彡」あり／　大徐：篆体・声符とも「彡」なし
＊段注：篆体のみ「彡」あり、注に「**潯**」篆の説解を一部引くが、字形への言及なし

このように，声符である「彡」のある「𡨦」か，「彡」のない「尋」かで，各本テキスト上の乱れがある。小徐本を見ると，篆体に「彡」を伴うものが2例あるにもかかわらず，構成要素は全て「尋」に作っている。このことと，「𡨦」篆の説解及び小徐注を併せて考えると，小徐原本に「尋」篆はなく，今本で「尋」を構成要素としている文字は，小徐の原本では皆な「𡨦」を構成要素としていたと考えるのが妥当ではないだろうか。

「繇」もやはり，誤刻の可能性があるのではないかと考えられる。「繇」を構成要素とする文字は以下の3字（対象外の重文「𨷂」を含めれば4字）である。

24 𣘃 崐崘河隅之長木也、從木繇聲、臣鍇按、穆天子傳曰、天子乃釣于河水、觀姑繇之木、注曰、大木也、在崑崙哀淑人之丘、（略）凡言𣘃、皆木高大之名、延秋反 【巻十一 木部】

＊段注：按許書有繇、無繇、或傳寫之誤 【六上 木部】

25 繇 瓜也、從瓜繇省聲、延朝反 【巻十四 瓜部】

26 𨷂 開閉門戶利也、從門繇聲、或曰縷十紘也、職流反 【巻二三 門部】

＊段注：从門繇聲（注：各本作繇聲、許有繇畜無繇、今正、按此篆當音由、唐韵乃旨沇切、未詳）【十二上 門部】

小徐は字形について特に言及しない。しかし，「繇聲」とする「𨷂」篆の篆体は「繇」に従っている。このことから，『說文』に「繇」篆・「畜」篆はあるが「繇」篆はないことを根拠として，伝写の間に誤られたとする段氏の指摘通り，「繇」は「繇」字の誤刻である可能性が高いと考えられる。

次に，「畾」について見てゆく。「畾」を構成要素とする文字は，以下の8字である。「畾」は，「尋」・「繇」とは異なり，篆体と構成要素の間に異同などの問題はない。

27 瓃 玉器也、從玉畾聲、臣鍇按、漢雋不疑瓃具劒飾也、謂爲鹿盧也、魯虺反 【巻一 玉部】

28 藟 艸也、從艸畾聲、詩曰、莫莫葛藟、一曰秬鬯、臣鍇曰、葛蔓也、柳水反 【巻二 艸部】

29 讄 禱也、累功德以求福、論語云、讄曰禱爾於上下神祇、從言畾聲、臣鍇按、尙書金縢之辭是也、柳水反

𧩙 讄或從纍 【巻五 言部】

＊段注：按本書無畾字、靁從雨象形作此、凡曰從畾聲者、皆從靁省聲也 【三上 言部】

30 鷽 鼠形飛走、且乳之鳥也、從鳥畾聲、臣鍇曰、飛生鼠也、柳水反

𩰫　籀文**𩰫**　【巻七　鳥部】

31　**櫑**　龜目酒樽、刻木作雲雷、象施不窮也、從木畾亦聲、臣鍇曰、龜目所以節畫也、若今禮尊有黃目是也、（略）畾者本象其畫文、故曰畾亦聲、指事、來堆反

罍　櫑或從缶、臣鍇按、爾雅盎謂之缶、注曰、盆也、畾器之大者、故又象作缶也（略）

𥁕　櫑或從皿畾、臣鍇曰、皿其器也

𩰫　籀文櫑、從缶回、臣鍇曰、回缶、雷之象也　【巻十一　木部】

32　**儡**　相敗也、從人畾聲、讀若雷、臣鍇按、潘岳西征賦曰、寮位儡其隆替、是也、來推反　【巻十五　人部】

33　**靁**　陰陽薄動、靁雨生物者也、從雨、畾象回轉形、臣鍇曰、陰陽相盪薄、易繫曰、雷風相薄、雷出則萬物出也、來堆反

靁　籀文靁、閒有回回靁聲也

雷　古文靁

𩰫　亦古文靁　【巻二二　雨部】

34　**壘**　軍壁也、從土畾聲、柳水反　【巻二六】

35　**勵**　推也、從力靁省聲、臣鍇曰、書史謂於城上推木、石下摧敵、謂之勵、魯內反　【巻二六　力部】

それを構成要素とする文字が1字しかない場合，小徐が見落とした可能性がないとは言い切れない。しかし，「櫑」篆（例文31）の注で「畾」に言及していることから，小徐がそれを構成要素として認識していることは明らかである。では，なぜ「疑義篇」にほかの7篆のように取り挙げなかったのであろうか。その理由を考えるために，同じく多くの文字の構成要素になりながら，一方は「疑義篇」に取り挙げられ，もう一方は「說文に無し」とされた「由」篆と「爿」字について振り返ってみよう。

「疑義篇考（一）」（pp.111－114）では，「由」篆は「疑義篇」に許慎の原本にあったはずのものとして挙げられてはいるが，『說文解字篆韻譜』や大徐本に残る小徐の注からは，「由」が「甹」字の省である可能性に言及したり，古くに「由」篆があったかどうか審らかではないと述べたり，許慎の原本にあったとすることに若干の迷いがあったのではないかと考察した。

また，「疑義篇考（二）」（pp.121－122）で取り挙げた「爿」は，同じく多くの文字の構成要素となっていながら，小徐は，「牀」篆の注で以下のように述べる。

36　故從木**𠬞**、**𠬞**（女革反、牀所從）則疾字之旁、象人之斜身有所倚著、實不成字、至于牆牂戕竝從牀字之省、形竝在右、其左竝曰聲、李陽冰妄言木字右旁爲片、左旁爲爿、云爿音牆、且說文竝無爿字　【巻十一　木部「牀」抜粋】

「牀」篆の字形は「木・𠂇に從う」とし，この「𠂇」の音は「女革反」であり，「疾」字の旁であるとする。それは「人の身を斜にし倚著する所有るに象り、實に字を成さず」と言う。更に続けて「牆・牂・戕に至りては竝びに牀字の省に從う、形は竝びに右に在りて、其の左は竝びに聲と曰う」とする。ここで小徐が「爿」を許慎原本にあったはずのものとはせず，「牀」の省とすべきだとする根拠は，「爿」が「疾」の一部であり，象形部分であって独立した文字となっていないことである。つまり，「由」篆と「爿」の扱いの差は，独立した文字とするか否かにあると考えられる。

では，「畾」はどうであろうか。小徐はその何れにおいても，段氏のように「靁省聲」とすべきであるとはしない。むしろ「櫑」（例文31）では，「畾は亦た聲」と述べ，意味上のつながりをも指摘している。「靁」（例文33）の説解に「畾は回轉する形に象る」とし，「櫑」の注でも「畾なる者は本と其の畫文に象る」「指事」とすることから，小徐が「畾」を独立した文字であると考えているかどうかには若干の疑問は残る。しかし，「櫑」の或体「罍」の注に「畾は器の大なる者」と述べることから，やはり独立した文字ととらえているのではないかと思われる。もし，小徐原本に「畾」篆がなかったとすれば，「由」篆と同じく「疑義篇」に取り上げられていたと考えられる。従って，小徐の原本には「畾」篆があった，もしくは，「𡗗」（例文16：古矢字）のように，いずれかの説解に「靁の或体」という注記があったが，伝写の過程でそれらが脱落した可能性が考えられるのではないだろうか。

ここまで，「疑義篇」の第二部分にのみ焦点を当てて論じてきたが，「右據偏旁有之、而諸部不見」の文字についての考察が，何故「疑義篇」のこの位置に置かれているかについて考えておく必要があろう。

「疑義篇」は，最初にも述べたように，第一部分の「古者文字少なくして、民務寡なし、是を以て古字 多く象形・假借たり（古者文字少、而民務寡、是以古字多象形假借）」で始まる六書論に続き，この第二部分があり，それに続く第三部分は「右 皆な說文の字體 小篆と小異有る者（右皆說文字體與小篆有小異者）」で始まり，字体の変遷を説く字形・字体論となっている。許慎「敍」では，文字の始まりから説き起こし，六書を説き，字体の変遷を説いていくが，この部分についての小徐の注が意外なほど少ない。この「疑義篇」全体が，許慎「敍」の注でもあり，小徐の字形論となっているとも言えよう。

ここで注目すべきは，この第二部分が六書論に続く位置に置かれていることである。つまり，小徐が文字の構造及びそれを反映している字形を論ずる際には，常にこの六書についての考えが基本にあるということである。これは当然のことであるが，再度確認しておくことも重要であろう。

37　始於八卦、瞻天擬地、日盈月虧、山拔水曲、金散土重、木挺而上、草聚而下、皆象形也、無形可載、有勢可見、則爲指事、上下之別、起於互對、有下而上、上名所以

立、有上而下、下名所以生、無定物也、故立一而下上引之、以見指歸、故曰指事、（略）無形無勢、取義垂訓、故作會意、（略）無形可象、無勢可指、無意可會、故作形聲、江河四瀆、名以地分、華岱五岳、號隨境異、逶迤峻極、其狀本同、故立體於側、各以聲韻別之、六書之中、最爲淺末、故後代滋益多附焉（略）故謂之轉注、義近形聲而有異焉、形聲江河不同、灘溼各異、轉注考老實同、妙好無隔、此其分也、五者不足、則假借之　【巻三九　疑義篇】

始め八卦に於いて、天を瞻、地に擬す、日盈ち月虧け、山拔き水曲がり、金散じ土重く、木は挺きんでて上り、草は聚まりて下す、皆な象形なり、形の載す可き無く、勢の見(あらわ)す可き有れば、則ち指事爲り、上下の別は、互對に起す、下有りて上あり、上の名の立つ所以なり、上有りて下あり、下の名の生ずる所以なり、定物無きなり、故に一を立てて下上に之を引き、以て指歸を見わす、故に指事と曰う、（略）形無く勢無ければ、義を取り訓を垂る、故に會意を作る、（略）形の象る可き無く、勢の指す可き無く、意の會す可き無し、故に形聲を作る、江河四瀆、名は地を以て分かち、華岱五岳、號は境に隨いて異なる、逶迤峻極、其の狀本と同じ、故に體を側に立て、各の聲韻を以て之を別つ、六書の中、最も淺末爲り、故に後代滋益多附す、（略）故に之を轉注と謂う、義形聲に近くして異有り、形聲は江河同じからず、灘溼各の異なる、轉注は考老實同じくして、妙好に隔たり無し、此れ其の分なり、五者足らざれば、則ち之を假借す

このように，小徐は六書の成り立ちを順序をつけて説いている。「形の象る可き」ものがあれば，「日」・「月」のように象形により文字を作り，「形の象る可き」はないが，「勢の指す可き」ものがあれば「上」「下」のように指事による。指事の場合，象るべき形がないので，「一」の上下におかれたものは，相対的位置関係を示すのみで文字ではない。更に「形の象る可き」も「勢の指す可き」もないが「意の會す可き」ものがあれば会意によるとする。「形の象る可き」も「勢の指す可き」も「意の會す可き」もない場合，形声によるとする。小徐は，形声に対して「六書の中で最も淺末」であると言う。なお，転注・仮借については，説解の中で文字の構造を説く際には用いられないので，ここでは取り扱わない。

このうち，注目すべきは，小徐が文字の構造を分析する際に，順序をつけている点である。まず，「形の象る可き」ものの有無を考え，次に「勢の指す可き」もの，更に「意の會す可き」ものの有無を考える。それら全てがない場合にはじめて形声であるとするのである。この考え方は，「通釋篇」の注のなかにも「某聲」に対して「疑うらくは聲の字多し（疑多聲字）」のような形でしばしば表れる。更に小徐が「指事」と注した場合には，もちろん文字と文字の位置関係などで「勢」を示す場合もあるが，「上」「下」のように，その文字の一部分が文字ではない場合があると考えていることにも注目すべきである。

これらを踏まえて考えれば，小徐が「通釋篇」に注釈を施す過程で，文字の構造を説く部分に，自らが基づいたテキストには親字としておさめられていない文字が表れた場合，伝写の過

程での誤記，隷定字の表記法の違いなどの可能性を考え，更に小徐の考える六書論に照らして考えた場合，独立して意味を持つ文字であるか否か，ほかの文字ではなくその文字を構成要素とすることが妥当であるかどうかなどを慎重に考察し，妥当であると判断したもののみが，「此蓋相承脱誤、非著書之時本所無」として「疑義篇」に取り上げられたのではないだろうか。その妥当性を判断する際に，例えば「疑義篇」に挙げられた7篆のうち「**驊**」篆は，それを構成要素とするのが「**埠**」篆のみではあるが，そこに「赤」い色という共通点が見いだされることが，「**解**」などではなく「**驊**」を構成要素と認めた理由となっているのではないかと考察した[12]ように，意味上のつながりを重視する傾向にあるのではないかと感じられるものもある。それは文字が作られる際には，まずは「形の象る可き」ものがあるかどうか，次に「勢の指す可き」ものがあるかどうかを考え，それらがない場合には更に「意の會す可き」ものの有無を考察し，全てない場合にはじめて音による区別をする形声字となるという六書の考え方に基づけば，当然の傾向であると言えよう。

以上のように，小徐はかなり慎重な考察を経て，許慎の原本にあったはずのものとして7篆を挙げている。たとえ1篆であれ，それを構成要素とする文字があれば，『説文』にはおさめられていたはずだと考えているからには，ここに挙げられるべき文字を小徐が全く見落とさなかったとは言い切れない。しかし，大徐の「十九文」で，ほかの文字の構成要素となっていた「剔」・「睆」・「峯」などが，「疑義篇」に取り挙げられなかったのは，単なる見落としなどではなく，「疑義篇考（一）」(pp.125－129) で考察したように，ほかの文字ではなく，それを構成要素とすることが妥当であると，小徐が判断しなかったためではないかと考えられる。

12)「疑義篇考（一）」p.121参照。

【資料】

〈表１（全）〉

部No.	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
1	一	5	1	5	1	
2	丄	4	6	4	6	
3	示	65	13	68	13	5
4	三	1	1	1	1	1
5	王	3	1	3	1	
6	玉	126	15	126	16	3
7	玨	3	1	3	1	
8	气	2	1	2	1	
9	士	4	1	4	1	
10	丨	3	2	3	2	
11	屮	7	3	7	3	
12	艸	440	31	446	31	7
13	蓐	2	3	2	3	
14	茻	4	0	4	0	
15	小	3	0	3	0	
16	八	12	1	12	1	
17	釆	5	4	5	5	
18	半	3	0	3	0	
19	牛	45	1	45	1	2
20	犛	3	1	3	1	
21	告	2	0	2	0	
22	口	182	21	180	21	
23	凵	1	0	1	0	
24	皿	6	2	6	2	
25	哭	2	0	2	0	
26	走	85	1	85	1	1
27	止	14	1	14	1	
28	癶	3	1	3	1	
29	歩	2	0	2	0	
30	此	3	0	3	0	
31	正	2	2	2	2	
32	是	3	2	3	2	
33	辵	118	30	118	30	
34	彳	37	7	37	7	
35	廴	4	0	4	0	
36	延	2	0	2	0	
37	行	12	1	12	1	
38	齒	44	2	44	2	1
39	牙	3	2	3	2	
40	足	86	4	86	4	1
41	疋	3	0	3	0	
42	品	3	0	3	0	
43	龠	5	1	5	1	
44	冊	3	2	3	2	
45	誋	6	2	6	2	
46	舌	3	1	3	1	
47	干	3	0	3	0	
48	谷	2	3	2	3	
49	只	2	0	2	0	
50	卤	3	3	3	3	
51	句	4	0	4	0	
52	丩	3	0	3	0	
53	古	2	1	2	1	
54	十	9	0	9	0	
55	卅	2	0	2	0	
56	言	248	31	248	32	2
57	誩	4	1	4	1	
58	音	6	0	6	0	
59	辛	3	1	3	1	
60	羊	4	2	4	2	

部No.	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
61	羑	3	1	3	1	
62	収(廾)	17	4	17	4	
63	羊	3	1	3	1	
64	共	2	1	2	1	
65	異	2	1	2	1	
66	舁	4	3	4	3	
67	臼	2	1	2	1	
68	晨	2	3	2	3	
69	爨	3	1	3	1	
70	革	59	11	59	11	
71	鬲	13	5	13	5	
72	鬲	13	12	13	12	
73	爪	4	2	4	2	
74	丮	8	1	8	1	
75	鬥	10	0	10	0	
76	又	28	16	28	16	
77	尸	2	0	2	0	
78	史	2	1	2	1	
79	支	2	1	2	1	
80	聿	3	3	3	3	
81	聿	4	0	4	0	
82	畫	2	3	2	3	
83	隶	3	1	3	1	
84	臤	4	1	4	1	
85	臣	3	1	3	1	
86	殳	20	1	20	1	
87	殺	2	5	2	5	
88	几	3	0	3	0	
89	寸	7	0	7	0	
90	皮	3	2	3	2	
91	䰜	2	3	2	3	
92	攴	78	6	78	6	
93	教	2	3	2	3	
94	卜	8	2	8	2	
95	用	5	1	5	1	
96	爻	2	0	2	0	
97	爻	3	1	3	1	
98	叕	4	0	4	0	
99	目	113	9	113	9	
100	眼	3	0	3	0	
101	眉	2	1	2	1	
102	盾	3	0	3	0	
103	自	2	1	2	1	
104	白	7	2	7	2	
105	鼻	5	0	5	0	
106	皕	2	1	2	1	
107	習	2	0	2	0	
108	羽	34	1	34	1	
109	隹	39	12	39	12	
110	雈	3	0	3	0	
111	雈	4	2	4	2	
112	艸	3	0	3	0	
113	苜	4	0	4	0	
114	羊	26	2	26	2	
115	轟	2	1	2	1	
116	瞿	2	0	2	0	
117	雠	3	0	3	0	
118	雥	3	1	3	1	
119	鳥	116	19	115	20	1
120	烏	3	3	3	3	1

部No.	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
121	華	4	2	4	2	1
122	冓	3	0	3	0	1
123	幺	2	0	2	0	1
124	幺	3	0	3	0	1
125	叀	3	3	3	3	
126	玄	2	1	2	1	
127	予	3	0	3	0	
128	放	3	0	3	0	
129	受	9	3	9	3	
130	叜	5	3	5	3	
131	歹	32	6	32	6	
132	死	4	1	4	1	
133	冎	3	0	3	0	
134	骨	25	1	25	1	
135	肉	140	20	140	20	
136	筋	3	2	3	2	
137	刀	64	7	64	10	
138	刃	3	2	3	2	
139	刧	3	0	3	0	
140	丰	2	0	2	0	
141	耒	7	1	7	1	
142	角	39	6	39	6	
143	竹	145	15	145	15	
144	箕	2	5	2	5	
145	丌	7	3	7	3	
146	左	2	0	2	1	
147	工	4	3	4	3	
148	巠	2	0	2	0	
149	巫	2	1	2	1	
150	甘	5	2	5	2	
151	曰	7	1	7	1	
152	乃	3	3	3	3	
153	丐	4	0	4	0	
154	可	4	0	4	0	
155	兮	4	0	4	1	
156	号	2	0	2	0	
157	亏	5	2	5	2	
158	旨	2	1	2	1	
159	喜	3	1	3	1	
160	壴	5	0	5	0	
161	鼓	10	3	10	3	
162	豈	3	0	3	0	
163	豆	6	1	6	1	
164	豊	2	0	2	0	
165	豐	2	1	2	1	
166	虘	3	0	3	0	
167	虍	9	3	9	3	
168	虎	15	2	15	2	
169	虤	3	0	3	0	
170	皿	25	3	25	3	1
171	八	1	1	1	1	
172	去	3	0	3	0	
173	血	15	3	15	3	
174	丶	3	1	3	1	
175	丹	3	2	3	2	
176	青	2	1	2	1	
177	井	5	2	5	2	
178	皀	4	0	4	0	
179	鬯	5	2	5	2	
180	倉	62	18	62	18	

部No.	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
181	厶	6	1	6	1	
182	會	3	1	3	1	
183	倉	2	1	2	1	
184	入	6	2	6	2	
185	缶	21	1	21	1	
186	矢	10	2	10	2	
187	高	4	1	4	1	
188	冂	5	2	5	2	
189	亳	2	0	2	0	
190	京	2	1	2	1	
191	亯	4	2	4	2	
192	富	2	3	2	3	
193	㐭	3	3	3	3	
194	亩	4	2	4	2	
195	嗇	2	3	2	3	
196	來	2	1	2	1	
197	麥	13	2	13	2	
198	夂	15	1	15	1	
199	舛	3	2	3	2	
200	舜	2	2	2	2	
201	韋	16	5	16	5	
202	弟	2	1	2	1	
203	夂	6	0	6	0	
204	久	1	0	1	0	
205	桀	3	1	3	1	
206	木	423	38	418	39	7
207	東	2	0	2	0	
208	林	9	1	9	1	
209	才	1	0	1	0	
210	叢	2	1	2	1	
211	之	2	1	2	1	
212	帀	2	1	2	1	
213	出	5	0	5	0	1
214	屮	6	1	6	1	
215	生	6	0	6	0	
216	乇	1	0	1	0	
217	丞	1	1	1	1	
218	𠦪	2	1	2	1	
219	華	2	0	2	0	
220	禾	3	0	3	0	
221	稽	3	0	3	0	
222	巢	2	0	2	0	
223	桼	3	0	3	0	
224	束	4	0	4	0	
225	橐	5	0	5	0	
226	口	26	4	26	4	
227	員	2	1	2	1	
228	貝	59	3	59	3	
229	邑	182	6	182	6	1
230	嚴	3	1	3	1	
231	日	70	6	70	6	
232	旦	2	0	2	0	
233	倝	2	1	2	1	
234	放	24	5	23	5	1
235	冥	2	0	2	0	
236	晶	5	4	5	4	
237	月	8	2	8	2	
238	有	3	0	3	0	
239	朋	2	1	2	1	
240	囧	2	2	2	2	

部No.	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
241	夕	9	4	9	4	
242	多	4	1	4	1	
243	毋	3	0	3	0	
244	马	5	1	5	1	
245	東	2	0	2	0	
246	鹵	3	3	3	3	
247	齊	2	0	2	0	
248	朿	3	0	3	0	
249	片	8	0	8	0	
250	鼎	4	1	4	1	
251	彔	1	0	1	0	
252	克	1	2	1	2	
253	禾	87	13	86	14	3
254	秝	2	0	2	0	
255	黍	9	2	9	2	
256	黍	2	0	2	0	
257	米	35	8	35	8	3
258	毀	2	0	2	0	
259	臼	6	2	6	2	
260	凶	2	0	2	0	
261	朮	2	1	2	1	
262	麻	3	0	3	0	
263	麻	4	0	4	0	
264	赤	2	1	2	1	
265	耑	1	0	1	0	
266	韭	6	1	6	1	
267	瓜	7	1	7	1	
268	瓠	2	0	2	0	
269	宀	72	16	71	16	4
270	宮	2	0	2	0	
271	呂	2	0	2	2	
272	穴	51	1	51	1	
273	癶	11	1	10	1	1
274	疒	102	7	102	7	4
275	冂(冖)	4	0	4	0	
276	冃	4	0	4	0	
277	冋	6	3	6	3	
278	网	3	0	3	0	
279	网	34	12	34	12	
280	襾	4	1	4	1	
281	巾	64	8	62	8	2
282	市	2	2	2	2	
283	帛	2	0	2	0	
284	白	11	3	11	2	
285	術	2	0	2	0	
286	黹	6	0	6	0	
287	人	245	14	245	14	9
288	匕	4	1	4	1	
289	匕	9	1	9	1	3
290	从	3	0	3	0	
291	比	2	1	2	1	
292	北	2	0	2	0	
293	丘	3	1	3	1	
294	仚	4	1	4	1	
295	壬	4	2	4	2	
296	重	2	1	2	1	1
297	臥	4	1	4	1	
298	身	2	0	2	0	
299	月	2	0	2	0	
300	衣	116	10	116	11	1

部No.	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
301	裘	2	1	2	1	1
302	老	10	0	10	0	
303	毛	6	0	6	0	
304	毳	2	0	2	0	
305	尸	23	5	23	5	
306	尺	2	0	2	0	
307	尾	4	0	4	0	
308	履	6	1	6	1	
309	舟	12	2	12	2	
310	方	2	1	2	1	
311	儿	6	0	6	0	
312	兄	2	0	2	0	
313	先	2	1	2	1	
314	皃	2	4	2	4	
315	兆	2	0	2	0	
316	先	2	0	2	0	
317	禿	2	0	2	0	
318	見	45	3	45	3	1
319	覞	3	0	3	0	
320	欠	65	4	65	5	1
321	歙	2	3	2	3	1
322	次	4	2	4	2	
323	旡	3	1	3	1	
324	頁	93	8	93	8	2
325	百	2	0	2	0	
326	面	4	1	4	1	
327	丐	1	0	1	0	
328	首	3	1	3	1	
329	䫑	2	0	2	0	
330	須	5	0	5	0	
331	彡	9	1	9	1	
332	彣	2	0	2	0	
333	文	4	0	4	0	
334	髟	38	7	38	7	
335	后	2	0	2	0	
336	司	2	0	2	0	
337	巵	3	0	3	0	
338	卩	13	0	13	0	
339	印	2	1	2	1	
340	色	3	1	3	1	
341	卯	2	0	2	0	
342	辟	3	0	3	0	
343	勹	16	3	15	3	2
344	包	3	0	3	0	
345	苟	2	1	2	1	
346	鬼	17	4	17	4	1
347	由	3	1	3	1	
348	厶	3	3	3	3	
349	嵬	2	0	2	0	
350	山	53	4	53	4	3
351	屾	2	0	2	0	
352	屮	6	0	6	0	
353	广	49	3	49	3	1
354	厂	27	4	27	4	
355	丸	4	0	4	0	
356	危	2	0	2	0	
357	石	49	5	49	5	3
358	長	4	3	4	3	
359	勿	2	1	2	1	
360	幵	1	0	1	0	

部No.	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
361	而	2	1	2	1	
362	豕	22	1	22	1	1
363	豸	5	5	5	5	
364	豆	5	0	5	0	
365	豳	2	1	2	1	
366	豸	20	3	20	2	
367	豈	1	1	1	1	
368	易	1	0	1	0	
369	象	2	1	2	1	
370	馬	115	8	115	8	2
371	廌	4	2	4	2	
372	鹿	26	6	26	6	2
373	麤	2	1	2	1	
374	色	4	1	4	1	
375	兔	5	0	5	0	
376	莧	1	0	1	0	
377	犬	83	5	83	5	
378	犬	3	0	3	0	
379	鼠	20	3	20	3	
380	能	1	0	1	0	
381	熊	2	1	2	1	
382	火	112	15	114	14	1
383	炎	8	1	8	1	
384	黑	37	1	37	1	1
385	囪	2	2	2	2	
386	焱	3	0	3	0	
387	炙	3	1	3	1	
388	赤	8	5	8	5	
389	大	18	0	18	0	
390	亦	2	0	2	0	
391	矢	5	1	5	1	
392	夭	4	0	4	0	
393	交	3	0	3	0	
394	允	12	1	12	1	
395	壺	2	0	2	0	
396	壹	2	0	3	0	
397	夰	7	1	7	1	
398	奢	2	1	2	1	
399	亢	2	1	2	1	
400	本	6	2	6	2	
401	夼	5	0	5	0	
402	太	8	0	8	0	
403	夫	3	0	3	0	
404	立	19	2	19	2	
405	竝	2	2	2	2	
406	囟	3	2	3	2	
407	思	2	0	2	0	
408	心	260	21	265	21	3
409	惢	2	0	2	0	
410	水	467	20	466	21	4
411	泰	3	2	3	2	
412	頻	2	0	2	0	
413	巛	1	2	1	2	
414	巛	2	0	2	0	
415	巛	10	3	10	3	
416	泉	2	0	2	0	
417	灥	2	1	2	1	
418	永	2	0	2	0	
419	辰	3	3	3	3	
420	谷	8	2	8	2	

部No	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
421	仌	17	3	17	3	
422	雨	46	11	46	11	
423	雲	2	4	2	4	
424	魚	104	6	103	7	2
425	鯊	2	1	2	1	
426	燕	1	0	1	0	
427	龍	5	0	5	0	
428	飛	2	1	2	1	
429	非	5	0	5	0	
430	卋	2	0	2	0	
431	乞	4	0	3	1	
432	不	2	0	2	0	
433	至	6	1	6	1	
434	臺	2	3	2	3	
435	鹵	3	0	3	0	
436	鹽	3	0	3	0	1
437	戶	10	1	10	1	
438	門	57	6	57	5	1
439	耳	33	4	32	5	3
440	臣	2	3	2	3	
441	手	266	20	266	20	1
442	𢍏	2	0	2	0	
443	女	258	14	238	14	3
444	毋	2	0	2	0	
445	民	2	1	2	1	
446	丿	4	1	4	1	
447	厂	2	0	2	0	
448	乀	2	1	2	1	
449	氏	2	0	2	0	
450	氐	4	0	4	0	
451	戈	26	1	26	1	
452	戉	2	0	2	0	
453	我	2	2	2	2	
454	亅	2	0	2	0	
455	瑟	2	2	2	2	
456	乚	2	1	2	1	
457	亾	5	1	5	1	
458	匸	7	0	7	0	
459	匚	19	5	19	5	
460	曲	3	0	3	0	
461	甾	5	3	5	3	
462	瓦	25	2	25	2	
463	弓	27	3	27	3	
464	弱	2	3	2	3	
465	弦	4	0	4	0	
466	系	4	2	4	2	
479	二	6	2	6	2	
480	土	132	25	131	27	
481	垚	2	1	2	1	
482	堇	2	3	2	3	
483	里	3	1	3	1	
484	田	29	3	29	3	
485	畕	2	1	2	1	
486	黃	6	1	6	1	
487	男	3	0	3	0	
488	力	40	6	40	6	
489	劦	1	5	4	2	
490	金	197	12	197	13	1
491	幵	1	0	1	0	
492	勺	2	0	2	0	

部No.	部首	部末表記		実数		うち大
		正文	重文	正文	重文	
493	几	4	1	4	1	
494	且	3	1	3	1	
495	斤	15	3	15	3	1
496	斗	17	0	17	0	1
497	矛	6	1	6	1	
498	車	100	8	99	8	
499	自	3	0	3	0	
500	𦥑	92	10	92	9	2
501	䏍	4	2	4	2	
502	盆	3	0	3	0	
503	四	1	2	1	2	
504	宁	2	0	2	0	
505	叕	2	0	2	0	
506	亞	2	0	2	0	
507	五	1	1	1	1	
508	六	1	0	1	0	
509	七	1	0	1	0	
510	九	2	1	2	1	
511	内	7	3	7	3	
512	嗇	2	0	2	0	
513	甲	1	1	1	1	
514	乙	4	1	4	1	
515	丙	1	0	1	0	
516	丁	1	0	1	0	
517	戊	2	1	2	1	
518	己	3	1	3	1	
519	巴	2	0	2	0	
520	庚	1	0	1	0	
521	辛	6	3	6	3	
522	辡	2	0	2	0	
523	壬	1	0	1	0	
524	癸	1	1	1	1	
525	子	15	4	15	4	
526	了	3	0	3	0	
527	孬	3	1	3	1	
528	云	3	2	3	2	
529	丑	3	0	3	0	
530	寅	1	0	1	1	
531	卯	1	1	1	1	
532	辰	2	1	2	1	
533	巳	2	0	2	0	
534	午	2	0	2	0	
535	未	1	0	1	0	
536	申	4	2	4	2	
537	酉	67	8	68	8	2
538	酋	2	1	2	1	
539	戌	1	0	1	0	
540	亥	1	1	1	1	
	計	8990	1190	8970	1205	119